

運動疫学 ニュースレター



日本運動疫学会
Japanese Association of Exercise Epidemiology

平成 28 年 12 月 10 日発行 No. 7

第 19 回日本運動疫学会学術総会開催報告

第 19 回学術総会事務局／東京医科大学 福島 教照

2016 年 6 月 18 日（土）、19 日（日）の両日に早稲田大学東伏見キャンパスにおいて、第 19 回日本運動疫学会学術総会が開催されました。今回の学術総会は「Community, Physical Activity, and Health」をテーマに総勢 170 人の方が参加され、大変盛大で有意義な学術総会となりました。

初日は、学術委員会企画シンポジウム 1 において「高齢者における健康課題と身体活動・運動の疫学」をテーマに、原田和弘先生（神戸大学大学院）、山田実先生（筑波大学）、小野玲先生（神戸大学大学院）、立木隆広先生（近畿大学）より疫学的知見の集約と今後の課題について、続く特別講演 1 では、近藤尚己先生（東京大学）から「運動嫌いを「動かす」には—社会疫学からの提案—」についてご講演頂き、健康

格差や健康政策等について活発な質疑が行われました。

二日目は、James F. Sallis 先生（University of California）から「Designing activity-friendly cities: International evidence from IPEN」と題して、10 カ国の国際共同研究における最新の知見についてご講演いただきました。先駆的研究者である Sallis 先生とはライブ中継の利点を最大限活用し積極的な質疑が展開されました。特別講演 2 では石川善樹先生（㈱キャンサースキャン）から「ネットワーク科学からみた身体活動の促進」と題して、行動のメカニズムやネットワークアプローチについてご講演いただきました。シンポジウム 2 では、「地域介入研究の計画と実施」をテーマに、田栗正隆先生（横浜市立大学）、重松良祐先生（三重大学）、

北湯口純先生（身体教育医学研究所 うんなん）より、クラスターランダム化試験の試験デザインや統計解析、身体活動事業の評価モデルの作成、現場における地域介入研究の実践方法についてご講演いただきました。

一般発表は口頭発表が 10 演題、ポスター発表が 23 演題の合計 33 演題あり、最優秀演題賞を甲斐裕子先生（(公財) 明治安田厚生事業団体力医学研究所）が、優秀演題賞を 5 名の先生が受賞されました（<http://jaee.umin.jp/meeting.html>）。受賞された先生方、おめでとうございます。

来年度の学術総会は、2017 年 6 月 17 日（土）、18 日（日）の二日間にわたり神戸大学で開催されます。来年も、皆様の積極的なご参加、ご発表をお待ちしております。



第 20 回日本運動疫学会学術総会のご案内

第 20 回学術総会長／関西福祉科学大学 野村 卓生

1. 日 時：2017 年 6 月 17 日（土）・18 日（日）
（大阪労災病院 治療就労両立支援センター）
2. 会 場：神戸大学医学部会館
シスメックスホール／
神戸大学医学部 新緑会館
（住所：〒 650-0017 兵庫県神戸市中央区楠町 7-5-1）
3. 組 織：
学 会 長：野村 卓生
（関西福祉科学大学 保健医療学部）
副学会長：小野 玲
（神戸大学大学院 保健学研究科）
準備委員長：浅田 史成
- 相 談 役：内藤 義彦
（武庫川女子大学 生活環境学部）
4. 懇親会：2017 年 6 月 17 日（土）
（神戸大学生協 医学部医学科食堂）
5. 参加登録受付開始時期：
2017 年 1 月中旬（学会ホームページでご案内いたします）
6. 問い合わせ先：浅田 史成
E-mail: f-asada@osakah.johas.go.jp
現在、ライフステージ別の対応などをふまえたプログラムを調整中です。

海と山が見渡せる神戸にて、今後の運動疫学会の方向性を考える総会にしたいと思っておりますのでご参加いただけますようよろしくお願いいたします。

CONTENTS

1. 第 19 回日本運動疫学会学術総会開催報告	1
2. 第 20 回日本運動疫学会学術総会のご案内	1
3. 第 17 回運動疫学セミナーのご報告	2
4. 第 2 回運動疫学の集い参加報告	3
5. 第 6 回国際身体活動公衆衛生会議 (The 6th ISPAH Congress) 参加報告	3
6. 私と運動疫学	4
7. 「日本運動疫学会プロジェクト研究」認定制度について一部修正のご案内	4

第17回運動疫学セミナーのご報告

セミナー委員会委員長／埼玉県立大学 北畠 義典

第17回運動疫学セミナーを、2016年8月19日（金）～21日（日）に、つくば市のホテルマークワンつくば研究学園と筑波大学総合研究棟Dに於いて開催致しました。今回は受講者33名（ベーシックコース22名、アドバンスコース7名、フリーコース4名）と講師10名の総勢43名の参加となりました。

本セミナーでは、いずれのコースも最終日にグループ（5～6人）に分

かれて「研究計画の発表」を行います。セミナー開始から2日目の夕方までは、研究計画立案に必要な内容及び最近のトピックが含まれた講義を受講し、2日目の夕食後からは計画立案に臨みます。今回、ベーシックコースからはコホート研究2題、介入研究2題の計画が発表され、アドバンス及びフリーコースからはコホート研究と介入研究の各1題が発表されました。どれも興味深いものとなりました。全

体的に計画内容のレベルが高くなってきており、最近では実行可能性が高い計画が作成されている印象を受けました。今回、立案された内容は日本運動疫学会のホームページに掲載されていますのでご覧ください。

来年度のセミナー開催も8月下旬を予定しております。多数の方のご参加を心よりお待ちしております。



第17回運動疫学セミナーに参加して

汐田総合病院／順天堂大学大学院 石毛 里美

8月19日～21日の3日間、運動疫学セミナーのアドバンスコースに参加させて頂きました。私は理学療法士として臨床で働きながら、社会人大学院生（修士課程）として研究をしています。このセミナーに参加したのは、指導教員である涌井佐和子先生より、研究の仕方を学ぶならここが良いと紹介されたことがきっかけでした。はじめは研究についての知識が全くなく不安もありましたが、熱意ある先生方のわかりやすい講義と、「良い研究を世に出したい」という思いを持った受講生の皆様と、その環境に飛び込むことで、自分自身も「ここまでやろう！」と意欲をかき立てられ楽しく学ぶことができました。

アドバンスコースではベーシック

コースに比べ講義の内容がさらにハイレベルであり、ついていくのがやっという感じでしたが、先生方の親切な指導により、何とか終わることができました。特に運動疫学実習では私の修士の研究内容を発表させて頂き、修士論文にとどまらず学術雑誌へ投稿するためにどこをブラッシュアップしたらよいかなどの深いご指導を頂き、非常に有意義でした。また、2日目のグループワークでは、実際に想定している研究の計画を立案する作業を行いました。様々なバックグラウンドの先生方と共に実現可能性や研究の意義などを考えながら進める過程は大変有意義でした。グループワークではまだまだ分からないことが多く、経験ある先生方に噛み砕いて教えていただきながらディ

スカッションに参加し、大変勉強になりました。

運動疫学セミナーのおかげで、研究に関する疫学や統計に関する知識と勉強の仕方を教わることができました。そして何よりも先生方、参加された受講生の方々と出会えたことで、様々な学びや悩みを共有し、今までリハビリ分野のことしか知らなかった私に新しい視野を拡げてくれたことがかけがえない財産になったと思っています。今後もこの経験やつながりを大切にしながら私自身の研究を進めていきたいと思っています。



第2回運動疫学の集い参加報告

(株) プロフィットジャパン/東京医科大学 菊賀 信雅

9月22日「第2回運動疫学の集い」が盛岡で開催されました。体力医学会の前日に開催され、参加者は54人と盛会となりました。

「疫学的手法の運動・スポーツ分野における応用」と題したシンポジウムでは、最初に、門間陽樹先生(東北大学)にシンポジウムのコンセプトと「運動・スポーツ分野における疫学的手法の応用例～パフォーマンス向上をアウトカムとした疫学研究～」についてお話し頂きました。次に、松下宗洋先生(早稲田大学)に、「スポーツ傷害をアウトカムとした疫学研究」として、疫学手法を用いたスポーツ傷害の危険因子の検討とスポーツ傷害予防行動の普及に関する研究の提案を頂きました。続

いて、木内敦詞先生(筑波大学)から「大学体育をフィールドとした疫学研究」について、『大学体育をフィールドとした運動疫学研究は、学生実態を把握したエビデンスに基づく大学体育を可能とし、古くて新しい研究領域「大学体育学」のさらなる発展が期待される』とお話を頂きました。また「学力をアウトカムとした疫学研究」では、笹山健作先生(岡山理科大学)から、『体力と学業成績との間には強くはないがポジティブな関連性があることが示唆されており、今後、身体活動・体力と学業成績の関連についてのエビデンスがさらに蓄積されることを期待している』とお話を頂きました。最後に、「国民におけるスポーツイベント

に着目した疫学研究」について澤田亨先生(医薬基盤・健康・栄養研究所)より、『スポーツイベントはスポーツを「応援する人」の心やQOL・健康などに何らかの影響を与えると考えられる。「2020年東京オリンピック・パラリンピックも素晴らしいレガシーを残す可能性がある」と言えるようになることを期待する』というお話を頂きました。終了後は懇親会が行われ、45人の参加者が、意見交換を含めた親睦を深めました。



第6回国際身体活動公衆衛生会議 (The 6th ISPAH Congress) 参加報告

慶應義塾大学 齋藤 義信

2016年11月16日から19日にタイのバンコクで開催された第6回国際身体活動公衆衛生会議 (The 6th ISPAH International Congress on Physical Activity and Public Health) に参加してきました。この会議は学術雑誌“Journal of Physical Activity and Health”を発行している学会 (ISPAH: International Society of Physical Activity and Health) が主催する学術集会であり、2年に1度開催されています。アジアでは初開催でしたが、オープニングセレモニーの演出やタイの身体活動推進の取組の紹介等、ホストの Thai Health Promotion Foundation がしっかり運営を行って



いる印象を受けました。本学会は、その名の通り身体活動の疫学やポピュレーション戦略に焦点を当てた運動疫学会の国際版のような学会のため、多くの会員の皆様が興味を持たれていると思います。私も以前から強い興味を持っており、今回発表のチャンスを得て、初めて参加することが出来ました。

学会プログラムは大変興味深い発表が並行して行われ、どの発表を聞か迷うことが多かったため、一緒に参加した慶應チーム(小熊准教授、博士課程学生の田島さん)で分担をしながら参加しました。私は身体活動環境の発表を中心に見て回りましたが、the LANCET Urban Design, Transport, and Health Series のシンポジウム、ネットワーク解析やオーディットによる環境評価や環境介入等、最新の知見が発表され、とても勉強になりました。

今回は、大会テーマ“Active Living for ALL”のもと、the Global Observatory for Physical Activity the Country Cards (globalphysicalactivityobservatory.com) および the Report Card on Physical Activity for Children and Youth (activehealthykids.org) の展示、

the LANCET Physical Activity Series II や身体活動政策についてのシンポジウム開催、



バンコク宣言の発表がなされ、世界の研究者や実務家、政策立案者が協力して身体活動を推進していくことの重要性が強調されていました。

私たちは、高齢者における身体活動とソーシャルキャピタルの関連について、共分散構造分析を用いた解析結果を発表し、国内外の方と議論することが出来ました。日本から参加された先生方と昼食や夕食を一緒にしながら懇親を深め、大会長の Fiona Bull 先生はじめ、James F Sallis 先生、Takemi Sugiyama 先生らともお話をさせていただきました。大変刺激を受けた学会になりました。

第7回の会議は2018年にロンドンで開催予定です。皆様も是非、参加をご検討ください。

「私と運動疫学」

自治医科大学 中村 好一

「専門は何か？」と問われると、「疫学」と答えるが、「では、何の疫学か？」と問われると、つらいものがある。世界的には循環器疾患の疫学と癌の疫学が2大主流で、わが国ではこれに加えて難病の疫学がある。どちらかというところにはそっぽを向いて、「すきま産業」ならぬ「すきま疫学」が本業で、川崎病の疫学（年間の発生患者数は近年増加中といえども1万5千人程度）やクロイツフェルト・ヤコブ病をはじめとするプリオン病の疫学（こちらは年間約200人）など、他の疫学者の参入を許さないいわば稀少疾患の疫学を生業としている。

さて運動疫学だが、その昔、鳥取大学の能勢隆之先生（現名誉教授、前学長）を班長とする健康増進センター利用者を対象としたコホート研究の研究班に加えていただいたことがあった。

この時に同じ班員だった当時の明治生命体力医学研究所の荒尾孝先生（現早稲田大学教授）や種田行男先生（現中京大学副学長）とお近づきさせていただいたのが運動疫学との関わりの端緒である。その後、両先生が中心となって運動疫学研究会（その後発展して現在の日本運動疫学会）設立の時からおつきあいさせていただいている。運動疫学セミナーにも講師として参加させていただいているが、ただし、運動疫学を直接やっている訳ではないので、講義は「論文の書き方」で、この辺は世の中のシステムは良くできていると感心するところである。ちなみに今年8月につくばで開催されたセミナーでは、講師陣の最年長になってしまっていた。

健康増進の基本は栄養、運動、休養と言われ続けている。疫学に関して言え

ば栄養に比べて運動はまだまだ発展する余地が多分にあるし、発展しなければならない。このような観点から本学会の益々の発展を、国民の健康増進のために、期待するところである。



2017年8月19～22日に第21回国際疫学会総会をさいたま市のソニックシティーで開かせていただくこととなり、現在一般演題の募集中である（<http://wce2017.umin.jp>）。前述の種田先生にも組織委員としてご参画いただき、運動疫学部門を充実させる所存である。多くの方々の演題発表と参加をお願いしたい。

「日本運動疫学会プロジェクト研究」認定制度について 一部修正のご案内

プロジェクト研究委員会委員長／慶應義塾大学 小熊 祐子

本学会では、2014年よりプロジェクト研究認定制度を発足しています。一部運用方法を修正したので、Q & Aでお知らせします。主な修正点は下線部です。奮ってご応募ください。

- ① 「日本運動疫学会プロジェクト研究」とは？：運動疫学分野の発展に寄与するとともに社会貢献度が高い研究プロジェクトとして、本学会が認定する研究のことを指します。
- ② 認定されるメリットは？：本学会が有するネットワークとの連結や情報共有などの面で、学会から研究プロジェクトの支援を受けられます。例えば、共同研究グループの組織化や、研究デザインの構築などです。
- ③ 応募条件は？：本制度の応募の研究代表者は日本運動疫学会会員とします。
- ④ 認定基準は？：(1) 新奇性・独創

性が高い、(2) 大きな成果が期待できる、(3) 社会貢献度が高い、などの要件を満たす運動疫学に資する研究を総合的に判断して、認定します。

- ⑤ 具体例は？：(1) 介入研究によるエビデンスの「つくる・伝える・使う」の促進に向けた基盤整備（研究代表者 筑波大学医学医療系・准教授 中田由夫先生）、(2) 運動疫学セミナーの評価に関する調査研究（研究代表者 筑波大学医学医療系・研究員、日本学術振興会・特別研究員 PD 笹井浩行先生）
- ⑥ 応募の手続きは？：募集期間は原則2月1日より4月30日とします。2016年度は移行期のため、随時受け付けます。研究代表者は、申請書をプロジェクト研究委員会（jaee.project@gmail.com）に提出してください。申請書は学会

HPよりダウンロードしてください。学術総会で採択研究を公表します。* 研究の提案は随時受け付けています。会員以外からの相談も受け付けます。

- ⑦ 研究期間は？：最長3年としますが、更新は可能です。
- ⑧ 終了後は？：研究終了後に研究成果を理事会に報告するとともに、学術総会や会誌（運動疫学研究）で公表することを原則とします。

* 学会HP、学会誌（2016.9月号、151ページ）に詳細を掲載していますので、そちらも併せてご参照ください。

発行：日本運動疫学会
編集：日本運動疫学会 広報委員会
日本運動疫学会事務局
〒160-8402 東京都新宿区新宿 6-1-1
東京医科大学公衆衛生学分野
E-mail: jaee.info@gmail.com